

研究室運営と切迫流産

Laboratory Management Before and After Threatened Abortion

松下祥子 Sachiko MATSUSHITA

今回、「男女共同参画関連で何か書いてくれ」というご依頼をうけ、正直戸惑いました。というのも、筆者は男女共同参画について「こうしたらいい」とか「あぁしたらいい」とか、偉そうなことはちっとも言えないからです。「妊娠しながら研究室を運営するのは大変だったっていう、単なる経験談なら書けますよ」と申し上げたら、「それでもいい」と言ってくださった寛大なる男女共同参画委員会委員の方々に、厚くお礼申し上げます。

筆者は博士号取得後、理化学研究所でのポスドク5年間を経て、日本大学にて研究室をもたせていただきました。上司に弱い自分の性格上、自分が研究室をもってから子供を産もうと思いついて、講義のない1~3月に産むよう計画し（ちなみに今は8~9月のほうが産む時期には向いていると思っています）、無事妊娠。ここまでは計画どおりでした。

でもねえ、計画どおりにいかないんですよね生物って。

日本大学文理学部は新宿にあります。朝一限の講義に出るためラッシュにもまれつつ大学に着き、なんか変だと思ってトイレへ行ったのです。

そしたら、出血していたんですね。

妊娠中の出血は流産の可能性がありますから、これは大事件です。でも、時は一限。学生さんは眠い中、必死に講義にきています。ですので筆者はそのまま教室へ向かい学生さんの出席を取った後、「先生はこれから救急車に乗ってくるから、この後は自習するように」と言い残し、本当に救急車に乗って病院へ運ばれました（よい子は真似しないように！出血したらすぐに安静にして病院へ行くんですよ！）。受けた診断は切迫流産。つまり「流産しちゃうから1ヶ月動くな」という指示を受けたわけです。

困ったのは研究室運営です。当時、学部生7名、フランス人留学生1名を抱えていた私。頼れる博士・修士課程の学生も、助教も、助手もいません。そこでどう……開き直りましたね。

直接会わなくても、メールや電話で指導すれば、きっとできる。学生を信じるしかない。

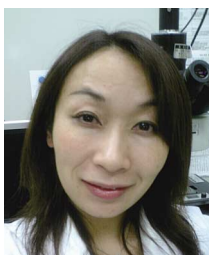
この時代の自分の日記を見ると、本当に壮絶です。切迫流産後に病院から自宅療養へ移ったときには「パソコンに向かうだけで冷や汗がでる」という状態なのに、実はその折、学会要旨提出直前。そう、高分子討論会です。さすがに学生と直接顔を合わせないと要旨提出は難しいと判断し、「ほぼドアtoドアでタクシーを使って研究室へ。1メートル歩くのに5秒はかかる状態で、ちょっと無理すると冷や汗だらだら」。妊娠という古今東西多くの女性達が経験してきたものが、これほど大変だとは……自分の無知さを突きつけられたのが、この切迫流産事件でした。

このときの頑張りとは、その後、フランス人留学生の学術論文アクセプト、高分子討論会でのプレス発表に結びついたのですが、業績以上に自分の人生の中で得られたものは先に書いた「学生を信じる」力でしょうか。

人を信じるというのは、とても難しいことだと思います。少なくとも、私はそうでした。信じて裏切られるのは、怖いし痛い。でも教育者は、どんな学生でも信じて指導するしかない。切迫流産の前の自分は、学生を信じる“ふり”しかできていませんでした。コアタイムを設定し、必要以上に手を出し口を出し、良く言えば面倒見がとて良く、悪く言えば学生の自主性を信じていませんでした。ですから切迫流産時に一人横になりながら、学生がどんな生活を送っているかがとても不安でした。

ももんちと考えて開き直ったときの心境を、どう表現してよいかわかりません。相手がどんな状態でも受け入れ、信じ続ける覚悟。たとえて言うなら、いち早く母になったような気持ち。教育者としてというより、人として大事な力を手に入れることができたと思っています（まあ、それまでの自分が未熟だったということなのですが）。

今、子供は無事2歳3ヶ月になりました。自分の経験から皆様に何か伝えることがもしあるとしたら、「苦勞せずに人生は楽しめない」という言い古された言葉だけかと思います。皆様が死ぬときに後悔しない人生を過ごされることを願いながら、この散漫な文章を終わらせたいと思います。



松下祥子 Sachiko MATSUSHITA

日本大学文理学部
准教授、博士（工学）
専門は物理化学
E-mail: sachiko@phys.chs.nihon-u.ac.jp